

# オノマトペの多義性と意味変化

——近世・近代の「まじまじ」を例に——

中 里 子\*

(平成十四年四月三十日受付)

(平成十四年六月十二日受理)

## 要 旨

オノマトペの多義性についてその特徴を考え、一例を取り上げ実際に多義が派生しさらに解消されていく過程を考察した。まず、現代語の多義のオノマトペから意味相互の関連を考察し、(1)擬音と擬態の共通性、(2)様態の共通性、(3)感覚の共通性、(4)一般語彙との関連、(5)隣接オノマトペとの関連、(6)音の類似性、という六つの特徴を見出した。次に近世・近代の「まじまじ」を取り上げ意味変化を見ながら、多義の派生とそれが解消される過程を検討した。「まじまじ」は、「目をばちばちさせる」という一動作とその動作を行う一般的な状況を表したが、その状況が「眠れない」「平然と(見る)」「見えていて落ち着かない」に分化したとき矛盾する意味を含んでしまい、混乱を生じた末、一動作を表す意味「じっと見つめる」になり、本来の「目をばちばち」という象徴性が失われた。「落ち着かない」意味は隣接オノマトペの「もじもじ」に、「眠れない」意味は語基が共通する「まんじり」にその意味が移行し、多義の縮小につながっている。形態による意味の分担も多義性の解消に関連すると思われる。

## KEY WORDS

オノマトペと一般語彙 Onomatopoeia and Non-onomatopoeic Word 多義性 Polysemy 意味変化 Change of Meaning  
オノマトペの形態 Forms of Onomatopoeia 隣接オノマトペ Adjacent Onomatopoeia

## はじめに

オノマトペが一般語彙とは異なる特殊な語群とされるのは、言語音と意味内容とに結び付きが感じられる点にある。言語音と意味内容とに必然的な結び付きがあるなら、ある一つのオノマトペ

が表す意味は一義的なものになるはずだが、実際には多義のオノマトペが多数存在する。オノマトペと対照される一般語彙の場合、「語義の多義化は史の変遷における変化や派生の結果」として起こるが、オノマトペの場合も、本来音象徴だったものが時代を経

\* 言語系教育講座

てその意味が固定され、象徴性が薄れたオノマトペに関して、一般語彙と同様の变化・派生が生じると考えられる。しかし一方で、ほぼ同時代に相反する意味を合わせ持っていた多義語のオノマトペも存在する。ここではその特殊な多義語のオノマトペの例として、近世・近代に見られる「まじまじ」を取り上げ、その意味変化を見ることで多義語のオノマトペの派生と多義性の解消を考える一資料としたい。

### 一 オノマトペの多義性

一般語彙に関する多義語の成因には、語の対象への適用のしかたのずれ、特殊化、具体化、比喩、借用、省略、がある。これに対しオノマトペの場合はどのような成因があるのか、詳細な研究はない。基本的には一般語彙の場合に準じ、具体化・比喩などが当てはまると考えられるが、それ以外にもオノマトペの語の特性に関係する多義語の成因があると思われる。今回は、各オノマトペの意味の派生を見るまでにはいたらないが、まず現代語のオノマトペを例に多義語の意味関係を考え、一般語彙とは異なるオノマトペの多義性を考える手掛かりとしたい。多義語のオノマトペの例は、阿刀田・星野編『擬音語・擬態語使い方辞典』、浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』を参考に拾い出した。辞典の見出し語に意味が二つ以上あれば多義語ということになるが、考察の煩を避けるため、『擬音語・擬態語使い方辞典』に意味が四つ以上記されているもので、『擬音語・擬態語辞典』に下位項目も含めて三つ以上の意味がある次の三八語を対象にした。

ガタガタ／ガッチリ／ガバガバ／ガボガボ／カラカラ／ガン

ガン／キューキュー／ギューギュー／キリキリ／グズグズ／グツ／クルクル／コロコロ／ゴロゴロ／サツパリ／ジリジリ／ダラダラ／チョン／チラチラ／チリチリ／ツンツン／トロトロ／トントン／バタバタ／ピタッ／ピタリ／ビリビリ／ピン／ピンピン／ブツブツ／ペコペコ／ペラペラ／ペロ／ポーツ／ポカポカ／ポカリ／ポカン／ポツポツ

これらの意味相互の関係を検討した結果、以下の六つの特徴が見出された。

#### (1) 擬音と擬態の共通性

三八語中二九語が擬音語・擬態語両方の意味を持つ語である。このような語の場合、多くは擬音語・擬態語の意味に関連性があり、音とその音が発する状態、さらにそこから連想される状態という意味関係が見られる。例えば「ガタガタ」は堅い物体が揺れ動くときの音（「地震で棚がガタガタ揺れる」など）を表すが、堅く組み合わさっているものが緩んでいる状態（「この机ももうガタガタだ」など）も表し、さらに「この組織はガタガタだ」などの抽象的な状態をも表す。また、堅い組み合わせのものが崩れる音・状態の激しさから、「スピードがガタガタと落ちた」のように急激に悪い方向へ落ち込む様子も表す。

擬音語の形態が意味に関連する場合もある。例えば「ゴロゴロ」はある程度の重量のものが転がる音と転がる状態を表すが（「岩石がゴロゴロと落ちてくる」「じゃがいもがゴロゴロ転がり出た」など）、語基「ゴロ」を重ねた語型が繰り返し・連続性を表すために複数のものが存在するイメージにつながり、「庭に大きな石がゴロゴロ転がっている」のように重量のあるものがいくつも転がる様子を表し、さらに「この程度の絵ならゴロゴロある」のようにいく

つもあってありふれている様子も表す。また、重量のあるものというの人間である場合に、「ゴロゴロ転がる状態」から、何もしていないでいる意味（家でゴロゴロしている）など）へと抽象化されている。

### (2) 様態の共通性

三八語中の九語は擬態語である。擬音語がなく擬態語だけである場合、いくつかの意味どしは様態の共通性がある。例えば「クルクル」は軽快に回転する様子を表す（風車がクルクルと回る）などが、それは動作や思考の回転、動きの軽快さにつながり（クルクルと立ち動く）「クルクルとよく気が回る」など、さらに回転の早さは「天気がクルクル変わる」のような変化の目まぐるしさにつながっている。また、回転の様態が「包帯をクルクルと巻く」「巻き物をクルクルと広げる」など、回転する動きを伴って巻く動作にもつながっている。

### (3) 感覚の共通性

いくつかのオノマトベは音声・様態に加えて身体感覚を表す意味を持っている。例えば「サツパリ」は余分なものやむき苦しいものがない様子（「サツパリした部屋」など）を表す擬態語であるが、同時に「シャワーを浴びてサツパリした」「サツパリした味」「サツパリした性格」「サツパリあきらめる」のように、皮膚感覚、味覚、精神性を表す意味を持ち、余分なものが残っておらずさわやかという感覚が共通している。また、「ビリビリ」は「窓ガラスがビリビリ震える」など振動する音や物を表すが、それが「電気ショックでビリビリした」のように身体に伝わる振動や、「足がしびれてビリビリする」のようにそれに似た身体感覚ともつな

がっている。

### (4) 一般語彙との関連

オノマトベは「ウキウキ」と「浮く」、「ユラユラ」と「揺れる」、「ネバネバ」と「粘る（粘し）」など、一般語彙と音の上で深い関わりを持つものがある。成立する段階から既に関連性を持つものもあり、どの時点で関連が出ているのかは掴めないが、多義語の場合、意味の一部が一般語彙と関連を持っているものがある。例えば「ジリジリ」は、ベルの音や太陽が照り付ける様子などの意味があるが、それらとは別に「じれる」「じれたい」と関連する「ジリジリしながら待つ」のような意味を持つ。「グズグズ」は、鼻を鳴らす音や不平を言う様子などの意味の他に「着物がグズグズになる」のように物の縮まりがない様子を表し、「崩れる」という語との関連がうかがえる。「キリキリ」は、きしりながら回転する音や物を表す他に「胃がキリキリ痛む」のように鋭い痛みを表すが、これは「きり」をもみ込むようなという一般語彙との関連が考えられる。

### (5) 隣接オノマトベとの関連

検討した三八語は、「グズグズ」「サツパリ」「チョン」「チラチラ」「ツンツン」以外は、すべて清音か濁音か半濁音で対応するオノマトベを持つ。例えば、「カラカラ」に対して「ガラガラ」、「ガバガバ」に対して「カバカバ」、「ブツブツ」に対して「フツフツ」「ブツブツ」があり、相互に対応する意味を持っている。また、「ガバガバ」と「ガボガボ」、「ドカドカ」と「ドタドタ」、「ドサドサ」、「ピタピタ」と「ペタペタ」など、似通った音のオノマトベどしが相互に対応する意味を持っている場合がある。隣接する

これらのオノマトペの意味の関連性が、多義語の要因の一つにもなることが考えられる。例えば「ポーツ」は、汽笛を鳴らす音や意識がぼんやりしている状態など「ポーツ」と重なる意味が多いのだが、「ポーツと頬を染める」のような場合は、「ポーツと炎がある」の程度を弱めた「ポーツと炎が小さくあがる」ようすから、ほんのり赤く・明るくなる状態を表す意味につながっているのではないだろうか。また「チョン」は拍子木の音などの意味があるが、「チョンと点を打つ」「チョンと飛び乗る」などは「チョット」「チョッピリ」などわずかな程度を表す周辺のオノマトペとの関連がうかがえる。

語の形態面では、例えば「ガタガタ」に対して「ガタン」「ガタツ」「ガタリ」「ガンガン」に対して「ガツ」「ガン」「ガーン」など、ほとんどの語に語基が共通するいくつかの形態がある。これらの相互の意味関係も多義性に何らかの関わりがあるだろう。

#### (6) 音の類似性

擬音語となるオノマトペの中で、何種類かの音を表すものがある。例えば「ガバガバ」は「水の中をガバガバ歩く」「テントが台風にあおられガバガバ揺れる」のように二種類の音を表し、「ゴロゴロ」は雷の音、猫が喉を鳴らす音、重い物が落ちる音などいくつかの音を表す。「ブツブツ」は「ロープがブツブツ切れる」「針でブツブツ刺す」「ブツブツと煮立つ」「ブツブツつぶやく」のように多様な音を表している。このように擬音語だけで多義語となるのは、言語音には限りがあり、オノマトペに形態上の制限があるため、自然界の様々な音を同じような言語音の形式で表さざるを得ないからである。

以上、(1)・(3)は多義語の意味どうしの関係、(4)・(5)は周辺語彙との関連で多義になる可能性、(6)は音声面の制限による多義性、という特徴をまとめたもので、これらがオノマトペの場合の多義語の要因として考えられる。今回取り上げた三八語はすべて擬態語の意味を持つことから、オノマトペも一般語彙のように具体的な意味から抽象的な意味へと広がっていく過程で様々な意味が生じると考えられる。

今回、一例(ブツブツ)しか該当しなかったので検討項目から外したが、時代を経て語音の交替が起こり、それが多義につながっていると思われる場合がある。現代語の「ブツブツ」の意味のうち、何かが沸き立つ音、つぶやく声・様子、針を刺したり物を切ったりする様子が、本来「ツブツブ」というオノマトペが表していた意味に相当する。「表面がブツブツしている」のような穴や突起がある様子は、「ツブツブ」というオノマトペにはない意味だが、「粒粒(つぶつぶ)」からの連想とも考えられ、音の交替が起こった「ブツブツ」の方にそれが加わったのではないだろうか。オノマトペに関しては一般語彙以上に、音声面での語相互の関係を考えていく必要があるだろう。

オノマトペは、音声や様態をいかにもそれらしく象徴的に表すものなので、言語音と意味内容の結び付きが強くなる反面、象徴する範囲が曖昧になり、それらしい様態を幅広く表すことにもなる。これは「語の意味を構成する内容は、個々の事物のもっている種々の属性のうち共通性の高いものであり、特殊性は捨棄されている」という一般語彙の意味の曖昧さの要因に通じるものである。多義語の曖昧さは、実際には文脈によって意味が限定されることで解消されるが、紛らわしい語義を含むオノマトペの多義語の場合、どのように曖昧さが解消されていくのだろうか。本稿

では、近世・近代に多義語であった「まじまじ」というオノマトペを例に、多義の派生と、意味の変遷とともに多義性が解消される過程を見ていきたい。

## 二 「まじまじ」の意味変化

### 二一 辞書の記述と現代語の「まじまじ」

「まじまじ」は先の『擬音語・擬態語使い方辞典』では、「視線をそらさずに相手を見つめているようす。」と解説されている。他の国語辞典、擬音語辞典類でも同様の記述があり、実際に使用されている以下の例を見ても、現代語の「まじまじ」は専らこの意味で使われていると考えてよいだろう。

・ある時、チエコスロバキアの閣僚会議で、一人の大臣が、「ひとつわが国にも海軍省を設置しようではないか」と提案した。他の大臣たちはあきれてこの大臣の顔をまじまじと見た。

(エデンを遠く離れて／池澤夏樹)

・「あなたは、やっぱり俺らとは別世界の人間や……」野田は、幸田の顔をマジマジと眺め、結局そのまま走り去った。

(黄金を抱いて翔べ／高村薫)

・一字一字が、まるでペン習字のようにくっきりとして美しい手紙だった。あの人はこんな文字を書くのか、と、私は(中略・執筆者)いつまでもその手紙をまじまじと見ていた。

(白河夜舟／吉本ばなな)

これらに見るように現代語では「見る」「見つめる」「眺める」など、見る行為を表す語と共起する用例がほとんどである。そ

の場合、あきれたりみとれたり等見るときの心的態度はさまざまであり、「まじまじ」は目をそらさず見つめるという動作そのものをまず表している。

一方『大辞林』では、「まじまじ」を以下のように四つに意味分類している。

- 1 じつと見つめるさま。
- 2 平然としてゐるさま。しゃあしやあとしてゐるさま。
- 3 目をばちばちするさま。また、眠れないさま。
- 4 ためらうさま。もじもじ。

2・3・4にはいずれも明治時代の小説から用例が引かれており、現代語では一義しかない「まじまじ」が、明治時代には多義語であったことがわかる。そこで、明治時代を中心に「まじまじ」の用例を収集して意味の変化を辿り、多義語のオノマトペが意味を縮小させる様相を見ていきたい。調査対象とした作品は稿末の表に示した。

### 二二 明治期の「まじまじ」

明治期の「まじまじ」を、先に見た『大辞林』の意味に対応させながら挙げていく。

#### 〈明治の用例〉

- ①「松波はどうだらう。」と暫くすると、子爵はまじ／＼と見入った病人の顔から眸を移して、さう問ふたので、

(濱子)

- ②お庄が笑出すと、女はマジ／＼其顔を瞞めて、「いやだよ、お前さんは真面目に聞かないから」と、煙管をポンと敲い

た。 (足迹)

③年寄はマジ／＼して巡査の顔を見て居たが、「そんな事、俺アに聞くより常人のおまきに聞いた方が好かんべえに。」と不興らしい顔をしてパイとそこを立った。 (南小泉村)

④もうお勢の事は思うまいと少時思の道を絶つてまじまじと歩いてみるが、 (浮雲)

⑤酒のいきほひあづかり上ぬりをしてしやア／＼まじ／＼へだてのついたてすこしひきさげかの客に打ちむかひ (中略…執筆者) ことバをかければ (西洋道中膝栗毛)

⑥今宵八分て寝付が悪く床にマジ／＼考へ (浅尾よし江の履歴)

⑦いつも聴かぬ鐘まで聴きて猶まじ／＼と眠られず (のこり艸)

⑧目は冴えて、まじ／＼していたが、さすがに疲が酷いから、心は少し茫乎して来た、 (歌行燈)

⑨繁味を這ひ出したいも山々ながら、又さう決する勇氣は無し、まぢ／＼として蹲つて (白玉蘭)

⑩曝し物になりて歸れば、出し抜きし母親は傲然として、下女までが取合はぬ、家内中の不興にまじ／＼として、手近に睡れる猫の頭を撫づれば、畜生までが嫌ひて台所に立ちぬ。 (三人妻)

⑪一人は如法の変屈ものにて一日部屋の中にまぢ／＼と陰気らしき生れなれど (たけくらべ)

⑫お島と云ふ例の他人が傍に居るので、気屈さうに柳之助は墨々してゐる。 (多情多恨)

用例①②③は辞書の意味1「じつと見つめるさま」に当たり、

現代語とほぼ同様に使用されているが、③のように副詞ではなく動詞として使用される例が明治期には見られた。他の意味分類でも「まじまじ(と)している」の使われ方が多く、そこから「まじまじ」とどのように「している」のか、どのように振る舞うのか、「見つめる」ときの心的態度が意味に反映されていくことになる。

用例④⑤は意味2「平然としているさま」に当たる。稿末の表に見るように意味2(表ではB)の用例は少なく、明治期以前の用法を受け継いだものであることが推測される。

用例⑥⑦⑧は、意味3「眠らないさま」に当たる。「大辞林」では「目をばちばちするさま」を同じ意味分類に入れているが、ここでは眠れない様子だけをこの分類に当てる。「目をばちばちさせる」というのは「まじまじ」の語源にも関わる意味なので、次項で検討する。

用例⑨⑩⑪⑫は、意味4「ためらうさま。もじもじ」に当たる。現代では使われないこの意味が、明治期には意味1に次いで多く見られた。意味4は意味2「平然としているさま」とは正反対の状態を表しており、状況によっては意味1とも対義であると言える。意味1「じつと見つめるさま」は現代語の意味につながるものだが、文脈によってはたじろがない様子を表し、落ち着かない様子を表す意味4とは正反対の意味になる。

意味1・4をもう少し詳しく記述しているのが『日本国語大辞典』である。『日本国語大辞典』では「まじまじ」の意味を以下のように四つに分類している。(分類項目を便宜上ローマ字で表わす。)

- A しきりに目ばたきなどをして眠れないさまを表わす語。
- B 事に動じないさま、平気でいるさまを表わす語。しゃあ

しゃあ。ずうずうしく。

C ひるまないではつきりと言ったり見つめたり見きわめようとしたりするさまを表わす語。

D 様子を見ながらとりつく島もないさま。決断できず手をこまねいてぐずぐずしているさまを表わす語。また、何も手につかずぼんやりしているさまを表わす語。「もじもじ」に近い。

意味A・Bはそれぞれ『大辞林』の意味3・意味2に相当する。意味Cは意味1の中のある状況を詳しく表した記述になっており、意味Dは意味4の、状況を見ていただけでもできない様子を詳しく表している。意味Cは「ひるまない」態度という点で、意味D及びそれに対応する意味4と対義になる。こうして見ると、もじもじと落ち着かない点では意味AとD（意味3・4）が、ひるまず落ち着いている点では意味BとC（意味1・2）がそれぞれ共通しており、「まじまじ」は大きく二つの異なる意味を合わせ持つ語であったことが考えられる。同時期に正反対とも取れる意味を合わせ持つと混乱が生じる恐れがある。実際、以下のようにどちらとも解釈できる用例があった。

⑬ 「はい國府津。〇十〇錢」道子は切符を握つてまち／＼切符口を眺めて居る。「お錢は？」  
(黒潮)

用例⑬は、じつと見つめるさまにも、もじもじしている様子にもどちらにも受け取れる。どちらに解釈するかは作中人物道子の性格理解にもつながる。同様に、両様の解釈を生む例を挙げる。

⑭ 笹村は火鉢に椅かゝりながら、まじ／＼と煙草を喫してゐた。  
(徹)

『日本近代文学全集』所収の「徹」には、この部分の「まじまじ」に注がつけられている。注では「まじまじ」は「しゃあしやあ」とか「平気で」という意で、母娘の切ない訴えにも耳をかさない態度として解される」と解説した後、「この場合は、かさにかかったようにも受け取られる母娘の言い分を不満気に聞きながら、もつともと思われるだけに何とも言いようがなく、惘然としている様子としても読み取れる。」と別解を加えており、平然としている意味と惘然としている意味（意味Dに通じる）と両様に解釈できることを示している。なぜこのように異なる意味を持ち、それらはどのように関連しているのだろうか。多義語に派生する経過と意味同士の関連を考えるにあたり、次に明治以前の意味を用例から見えていく。

### 二―三 明治期以前の「まじまじ」

まず、辞書の記述を見てみよう。『日葡辞書』の「マジマジシテ」の項には次のように書いてある。

何一つとして心を配ることもなく、非常にのんびりとしてゐること。また、眠ろうとして眠れないで臥していること。

また、『角川古語大辞典』には以下のように記されている。

- 1 目があいてきて眠れないさま。しきりにまばたきをしたりするさまを含む。
- 2 無関心で平気な顔つきや態度でいるさま。
- 3 様子を見守るだけでどうしようもないさま。手出しがで

きず見ているさま。

『日葡辞書』の「非常にのんびりしている」という記述は、『角川古語大辞典』では意味2の例に挙げてあるので、平然とした態度につながっているものと考えられる。もともと「まじまじ」は、眠れないさまと平然とした態度とを表したオノマトペであったようだ。なお、『角川古語大辞典』の意味分類は『日本国語大辞典』の意味分類A・B・Dに相当するので、稿末の表は明治期以降と対照しやすいよう、『日本国語大辞典』の意味分類に当てはめた。以下、いくつか用例を挙げておく。

〈江戸の用例〉

⑮ 楽阿弥ハ。目うちしばたゝきて。まじくとして、舟バたによりかゝり居る。  
(東海道名所記)

⑯ きやくははらがたつてならねども、せんかたなく、ねるにもねられず、あんどこのむだ書をよんでまちくしているうち、七ツのひやうし木もなりて  
(通言総籙)

⑰ 「いかに御意が重い迎主君をねらふをまじく」と。見て居る者の有ルべきか。  
(義経千本桜)

⑱ 「ヤイこの女アふさくしい。そのうつくしいしヤツ面でまじくと虚をぬかすか。  
(春色梅児誉美)

⑲ そなたは見へぬがいっそまし。傍でまじく見て居る心推量して給もの。  
(新版歌祭文)

⑳ 云こめられてしよげ鳥のまちくとして閉口す。  
(夏祭浪花鑑)

⑮～⑳は2例ずつ『角川古語大辞典』の意味1・2・3に対応

する。「まじまじ」は「まじろく／＼」と同根であると言われているように、「目をばちばちさせる」というしぐさから来ているオノマトペであるようだ。目をばちばちさせる動作が行われるある特定の状況、その動作がより一般的に現れる状況が「眠れない」様子であったため、まず眠れない様子を表す語として使われた。これは明治期にも受け継がれている。次に、目をばちばちさせながら見る、という行為に重点が置かれると、専ら見ているしかない傍観者の態度を表し、そこから「無関心で平気な様子」と「見ているだけでどうにもできない様子」という異なる二方向の意味が出て来たのであろう。江戸期の用例がほとんど得られなかったため、どちらの意味がどのような分野に多いか、どのような状況で使われているかなど、詳細な検討ができなかったが、『日葡辞書』に見る限り、まず前者の意味が先にあつたと考えてよいだろう。調査範囲の用例数の割合も「無関心で平気な様子」の方が多かった。浄瑠璃や歌舞伎の脚本に例が多いことから、目をばちばちさせる所作を表す語として使われ、場面に応じて「見ているだけでどうにもできない様子」を表す例が出て来たとも推測される。江戸期にはいずれの例も「目をばちばちさせている」という動作が基本にあり、「まじまじ」を持つオノマトペとしての意味、音象徴性が生きている。どんな様子で見ているかまでは表現せず、動作だけを表す例も見られる。

㉑ ワアト一撃そのまゝに、氣も魂もつり上り、ベツたりこけて目をまちく、グツともスウとも聲も出ず、そら腰ぬけてどうまぶれ。  
(滑稽和合人)

明治期にも目をまじまじさせるといふ動作のみを表す用例があ



るが、他の多くの用例では、この動作で表される心的態度、すなわち平然としているのか、どうにもできず落ち着かないのか、という態度を意味に含んでおり、そこからさらに意味が派生することになる。次項で明治期以降の用例を見ながら、「まじまじ」の意味変化と多義の派生及び多義性が解消されていく傾向について考へたい。

## 二一四 「まじまじ」の意味変化

大正期になると、「まじまじ」の用例を探すのは困難になる。稿末の表に見るように、意味が「じっとみつめる」の意味にほぼ限定されていくことも一因であろう。<sup>10)</sup> 意味Cに分類した二六例中二五例が、以下のように「見る」行為を修飾している。

⑳ 痛々しいまで大きくなった眼を開いて、まじまじと意外な人でも見るように葉子を見るのだった。  
(或る女)

㉑ 柳澤は(中略・執筆者)笑ふのは厭だといふやうな顔をして黙り込んでまじまじ他の顔を瞻つてゐた。  
(うつり香)

二五例の被修飾語の内訳を示す。

見る	3例	眺める	5例	みまもる	2例
見やる	9例	見入る	2例	見亘す	1例
見廻す	1例	眼を光らす	1例	眼を見開く	1例

残りの一例は、「隅の方でまじまじと聴いていた斎藤が口を出した(学生時代)」という例だが、これは斎藤がことの成り行きをじつと見守りながら聞いていた様子を表しており、「じつとみつめる」

行為につながっている。大正中期にはほぼ現代のように「目をそらす見つめる」という意味に落ち着いてきたと考えられる。

「まじまじ」は、前項で見たように、まず「目をばちばちさせる」動作を表すオノマトペとして使用され、その動作が一般になされる状況つまり「眠れないで目をばちばちさせる」場合に使用された。そして「見る」行為に重点が置かれたとき、それがどのような心的態度で使用されるのかを含むようになり、一つは「見ているだけの無関心な態度、平然とした態度」を、もう一つは「見ようになつた。これらはいずれも本来の「目をばちばちさせる」という音象徴に基づいており、先に見たへ様態の共通性による多義の派生」に相当する。さらに「見ている」行為そのものを表すとき、「見ているだけ」という消極的な姿勢ではなく、何かを見極めようとするなどの積極的な見る姿勢を表すようになり、「目をそらすじつとみつめて見る」という意味に変化し、「もじもじ落ち着かない」様子を表す意味と対立することになる。この意味の混乱を避けるためか、「もじもじ落ち着かない様子」を表す意味は消えていくのだが、これは「もじもじ」というオノマトペと音が通じることに関連するだろう。そもそもこの意味が派生した段階で「もじもじ」からの連想があつたと考えられる。すなわち先に見たへ隣接オノマトペの関連による多義の派生」の例に相当する。明治期に「墨々」に「まじまじ」「もじもじ」両様の振り仮名の例がある。

㉒ 少将は墨々として居たが、何か落ち着かぬ様で

㉓ 比企の顔を墨々瞋めて

いずれも徳田秋声「雲のゆくへ」からの用例である。「墨々」は当時は広く使われていたが、これに「もじもじ」と振った例がこの作品には二例あり、「まじまじ」と「もじもじ」の混乱の表れと見ることができ。

「まじまじ」の意味が消極性と積極性と対立した意味を兼ね備えたとき、混乱を解消する意味でも「もじもじ」に重なる意味の一部を譲り、本来の「見る」様態を表す意味が残ったのだろう。

「まじまじ」の例に関しては、隣接オノマトペに意味をまかせることで多義の一部が縮小することにつながっている。

明治期の用例①②③や大正期の例を見るとほとんどが「見る」行為を修飾しており、現代語の「じっと見つめる」意味へとつながっている。が、この「じっと見つめる」行為には、もはや本来の「まばたき」という動作は含まれていない。多義が派生し再び縮小される過程で音の象徴性が失われ、意味が変化したと考えてよいのではないか。

「目をばちばちさせる」という本来の意味が薄れるのと平行して、その動作につながっていた「眠れないさま」は「まじまじ」の意味から消える。この「眠れないさま」という意味は、「まじまじ」の派生形である「まんじり」に完全に移行する。多義が語形態によって自然に解消された例として、次に「まじまじ」と「まんじり」について見ていく。

## 二一五 「まじまじ」と「まんじり」

明治・大正に見られる「まんじり」の用例をいくつか挙げる。

②⑥ 一夜まんぢりとも眠らなかつた。(琵琶歌)

②⑦ 六時がなるまでまんじりともせず待ち明かした。

(琴のそら音)

(多情多恨)

②⑧ もう帰るか、もう帰るか、待つ間を独兀然まんじりとしてみると、

②⑨ 古藤はあまりはずんだ葉子の声にひかされて、まんじりとその顔を見守った。(或る女)

③⑩ おやとすかして見れば和服の人物・忍び巡査か探偵か、まんじりとして見て居る處へ、(白玉蘭)

稿末の表に見るように、「まんじり」はほとんどの例が「眠れない」様子を表すが、そのまま「まんじりと」と使用される例は用例②⑧の一例しかなく、他は用例②⑨⑩のように打ち消し語を伴い、「まんじりともしない」などの形で使用される。用例②⑨⑩のように、「まじまじと見る」と重なる意味で使われる例は少数で、一般には「まんじりと」が打ち消し語と呼応して「眠れない」の意味を表す固定化した使用に落ち着いていたと考えてよいだろう。今回の調査範囲では、江戸時代の用例は辞書を頼りに探した次の一例しか見られなかった。

③⑪ ゆふべからまんじりともしねへから。ト又ねぶる。(傾城買四十八手)

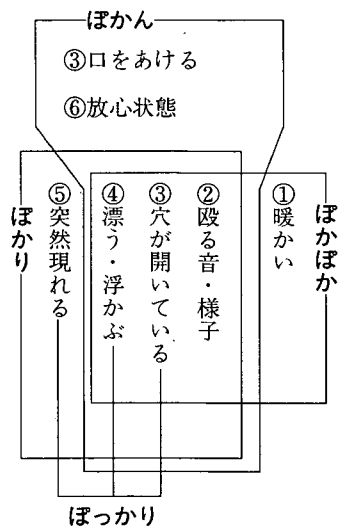
すでに江戸時代に、「まんじりとも…(打ち消し)」という用法が成立していた可能性もある。まんじりとしている様子が「眠れない」という否定を含む内容なので、それがそのまま語形式に現れたのだろう。「まじまじ」に対して「まんじり」は撥音が挿入された強調形で、より音象徴性が薄れており、その意味では一般語彙に近付いているため、慣用化した用法も成立しやすと考えら

れる。これに対し、「まじまじ」にあった「眠れないさま」の意味は、「目をばちばちさせる」という動作を表す点でオノマトペとしての価値があったので、「目をばちばちさせる」という意味が失われるとともに、「眠れない」意味は、固定化した表現になった「まんじりとも」（打ち消し）に完全に移行する。結果として「まじまじ」の意味の一つが消え、多義性が解消されていくことにつながっている。

### 三 オノマトペの形態と意味の分担

オノマトペの多くは、語基が共通するいくつかの形態が派生的に存在している。例えば「にこ」を語基とするオノマトペには「にっこ」「にっこり」「にこっ」「にこり」がある。これらは笑顔の様態を表す点で共通し、それぞれの語形態に応じて、一回性・継続性などの違いが現れる。この「にこ」系統のオノマトペのように意味がほとんど重なる一群に対し、語形態によって独自の意味を分け持つ一群もある。例えば、先に見た多義のオノマトペの中に「ぼかぼか」「ぼかり」「ぼかん」があったが、「ぼか」を語基とする一群のオノマトペの場合は、相互に共通する意味と独自の意味を持っている。「ぼっかり」も加えて簡単に意味の関係を示すと下記のようになる。

これらは「ほか」「ほかほか」「ほっかり」という古語のオノマトペから発展したものと思われるが、それぞれの意味の一部が消え、一部が現代語の「ぼか」系統のオノマトペに残っている。意味の変遷や消えた意味、残った意味に関して今回は調査が及んでいないが、現代語を見る限りにおいて、「ぼか」を語基とする一群のオノマトペは語基の共通性により共通する意味も持ちながら、



それぞれの語形態に応じて意味を分け持っているのがわかる。このことによって多義語のオノマトペが多少とも意味の広がりを押さえることになっていくが、それを言うためには、語史的研究を加えたいいくつかの資料がさらに必要になると思われる。ここでは語形態による意味の分担が多義性の解消に関連性があるという点との指摘にとどめたい。

前項で見た「まじまじ」は、一つは隣接オノマトペの「もじもじ」と重なる意味が消えることで多義が縮小された。もう一つは形態で関連する「まんじり」に意味の一部が移行することで多義の縮小につながっていた。「まじまじ」「まんじり」は「まじ」を語基とするオノマトペで、調査範囲内では他に、多少変形ではあるが「まじりまじり」「まじりまじり」「まじくじ」が見られた。用例数が少ないので、変形グループのものとは意味の分担について考察できなかったが、「まんじり」は「まじまじ」の意味の一部を受け持っていく形で現在に残っている。多義性の解消の一例としておきたい。

## おわりに

オノマトペは、他言語との対照も併せて音韻面、形態面から広く研究されているが、意味論の分野では「事実上まだ未開拓」であると指摘されている。<sup>11)</sup> 今回は意味に関して多義性に焦点を当てて、まずオノマトペに見られる多義語の特徴のいくつかを考察した。次に「まじまじ」の意味変化を例に、多義が派生し縮小していく過程を見ることで、多義語の派生を具体的に検討し、さらにオノマトペの多義性が解消される方向性を考察した。このように、意味に関しては一つ一つの例を詳細に検討し、それを積み重ねていくことで一般論を構築していく必要がある。今後も具体的な考察を重ね、オノマトペの意味に関する研究の一助としていきたい。

## 注

(1) 『国語学大辞典』「擬声語・擬態語」の項では「記号とする言語音と記号化の対象となる種々の事象(中略・執筆者)との間に、ある種のつながり即ち音象徴(sound symbolism)が存在すると考えられる語の一群」と定義され、田守・スコウラップ『オノマトペー形態と意味』では「オノマトペと考えられている語の形態と意味の関係が恣意的ではなく、何らかの形で相関している」と記述されている。

(2) 森田良行『意味分析の方法』二三頁

(3) 『国語学大辞典』五八二頁「多義語」の項。

(4) 「チリチリ」は「ジリジリ(チリチリ)」に対応する。

(5) 『国語学大辞典』五八四頁「多義性」の項。

(6) 『現代新国語辞典 改訂新版(学研)』『三省堂国語辞典 第五版』『新明解国語辞典 第五版(三省堂)』『岩波国語辞典 第四版』等、現代語の国語辞典類は同様の記述であった。

(7) 表の意味分類は、明治期と明治期以前のものに対照させやすいように『日本国語大辞典』によった。便宜的にA→Dの記号で示した。作品の本文は、明治・大正は「CD→ROM版新潮文庫明治の文豪」「CD→ROM版新潮文庫大正の文豪」及び、明治文学全集(筑摩書房)によった。江戸期は、日本古典文学大系(岩波書店)、新日本古典文学大系(岩波書店)、有朋堂文庫によった。

(8) 土井・森田・長南編訳『邦訳日葡辞書』

(9) 『角川古語大辞典』「まんじりと」の項に「眼球がびくりと動いたり一瞬まばたきをしたりする意の『まじろく／ぐ』と同根の、『まじまじ(と)』の転。」という記述がある。「たじろぐ」と「たじたじ」、「ゆらぐ」と「ゆらゆら」のように、同根の動詞を持つと思われるオノマトペがいくつか存在するが、「まじまじ」もその一例であろう。

(10) 明治期と大正期とで「まじまじ」の使用率に差があるのは、比較的「まじまじ」を好んで使う作家の使用の変化からもわかる。徳田秋声は明治期に「まじまじ」を多用した作家だが、大正期になるとその使用が激減する。例えば明治三二年「憎けもの」に二例、三三年「雲のゆくへ」に一〇例、四三年「足迹」に七例、四四年「徹」に一例、大正二年「足袋の底」に四例見られるが、大正九年「或賣笑婦の話」一二年「無駄遣」「ファイヤ・ガン」一三年「花が咲く」一五年「過ぎゆく日」には一例もない。中には明治の作品よりかなり短い作品もあるが、一例も見られないのは「まじまじ」の意味が限定されたこととも関係するだろう。

(11) 田守育啓・スコウラップ『オノマトペー形態と意味』一八四頁

## 参 考 文 献

- 浅野敏彦 一九八九 「語義の変化」 『講座日本語と日本語教育6 日本語の語彙・意味(上)』 所収 明治書院
- 宛壽雄・田守育啓編一九九三 『オノマトピア 擬音・擬態語の楽園』 勁草書房
- 金田一春彦一九七八 「擬音語・擬態語概説」 『擬音語・擬態語辞典』 所収 角川書店
- 田守育啓 二〇〇〇 「日本語オノマトペの『語彙性』および『オノマトペ度』に関する実証的研究」 『人文論集』 三五卷・二三号 神戸商科大学
- 田守育啓・スコウラップ一九九九 『オノマトペ―形態と意味―』 くろしお出版
- 前田富祺 一九八二 「和語の意味変化」 『講座日本語学4 語彙史』 所収
- 森田良行 一九九六 「意味分析の方法」 ひつじ書房
- 辞 典 類
- 『江戸語の辞典』 前田勇編 一九七九 講談社学術文庫
- 『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子編 一九七八 角川書店
- 『擬音語・擬態語使い方辞典』 阿刀田稔子・星野和子編 一九九三 創拓社
- 『角川古語大辞典』 中村幸彦・国見正雄・坂倉篤義編 一九九九
- 『言泉』 (明治四二) 落合直文著・芳賀矢一改修 一九二八 大倉書店
- 『国語学大辞典』 国語学会編 一九八〇 東京堂出版
- 『古語大辞典』 中田祝夫編・監修 一九八三 小学館
- 『時代別国語大辞典 室町時代語編』 一九九一 三省堂
- 『新編大言海』 (明治二四) 大槻文彦 一九八二 富山房
- 『大辞林第二版』 松村明編 一九九五 三省堂
- 『大日本国語辞典』 上田萬年・松井簡治 一九一九 富山房
- 『日本国語大辞典 第二版』 二〇〇一 小学館
- 『日本大辞書』 (明治二五) 山田美妙 覆刻版 一九七九 名著普及会
- 『邦訳日葡辞書』 土井忠生・森田武・長南実編訳 一九八〇 岩波書店



## Polysemy and Change of Meanings on Onomatopoeia — in the Case of “Majimaji” —

Michiko NAKAZATO\*

### ABSTRACT

The polysemy of onomatopoeia was described in this paper, which was different from that of non-onomatopoeic words. I examined how some of the onomatopoeia obtained multiple meanings and adapted to one by analyzing the actual cases.

At first, following six features were described, regarding the relations among the meanings of polysemous onomatopoeia; (1) similarity of the imitative and mimetic meanings, (2) similarity of movement of words, (3) similarity of feelings, (4) relation to non-onomatopoeic words, (5) relation to adjacent onomatopoeia, and (6) similarity of sounds.

Secondly I examined the meanings of “majimaji”, which were changed from Edo to Taisyō periods as an example of polysemous onomatopoeia. “Majimaji” originally implied blinking-eye movement and such action. And then its meaning was distinguished into multiple meanings such as <hardly sleeping>, <(looking) without shaming>, and <looking awkwardly>—led to discrepancy and confusion among them. At last “majimaji” meant <watching fixedly> and lost the sound symbolism of blinking. On the other hand, the meaning of <looking awkwardly> was completely transferred to similar-sounding onomatopoeia, as “mojimoji”, another meaning of <hardly sleeping> was transferred to “manjiri” which was derived from “majimaji”. These transformations lead to the reduction of polysemy. Appearance of the related onomatopoeic words to share the meanings of polysemy was considered to facilitate the reduction of polysemy.